平成２４年市川市芸術祭

市響

第363回 交響楽の午後

マーラー/
交響曲第1番「巨人」（新校訂版1992）

G. Mahler/Symphonie Nr. 1 D-dur "Der Titan"

十束尚宏／交響曲（初演）

指揮
十束尚宏

管弦楽
市川交響楽団

2012.7.22（日）

午後2時開演（1時30分開場）
入場無料

市川市文化会館大ホール
（JR総武線・本八幡駅下車）

＊本演奏会は演奏時間も長くまた内容も複雑な為、満10歳未満のお子様のご入場はできません。

お問い合わせ：TEL.047-339-3554市川交響楽団協会（篠田）市響ホームページ：http://www33.ocn.ne.jp/~ichikyo/
主催：市川交響楽団協会 共催：市川市 協力：ヤマザキ製パン株式会社 後援：千葉交響楽団協会

本日のプログラム

十束尚宏／交響曲（初演）

Ⅰ　中庸に、力強く

Ⅱ　静かに遅く、厳粛に

～休憩～

マーラー／交響曲第1番「巨人」（新校訂版 1992）

Ⅰ　ゆるやかに、重々しく

Ⅱ　力強く激しく、しかし速すぎずに

Ⅲ　荘厳にそして威厳をもって、引きずらずに

Ⅳ　嵐のように速く

Profile　プロフィール

Conductor 指揮：**十束尚宏**（とつか・なおひろ）

東京出身。桐朋学園大学指揮科及び研究科に学ぶ。故森正、小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明の各氏に師事。1982年「第17回民音指揮者コンクール」第1位入賞。1983年タングルウッド音楽祭にフェローシップ・コンダクターとして招かれ、クーセヴィツキー指揮大賞を受賞。84年、ボストン交響楽団にて副指揮者を務め、同年新日本フィルハーモニー交響楽団定期演奏会で日本デビュー。同年ベルリンに留学、またタングルウッド音楽祭に再度招かれバーンスタイン、プレヴィン、スラットキン各氏に師事。　89年NHK交響楽団定期演奏会を指揮以降、国内オーケストラとの共演を数多く重ねている。群馬交響楽団正指揮者、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団常任指揮者、広島交響楽団音楽監督を歴任。97年フランス「ノルマンディーの10月」音楽祭に広島交響楽団と共に招かれる。海外では、ストックホルム・フィル、ゾーリンゲン、ニュルンベルクの各歌劇場管弦楽団、リスボン・グルベンキアン管弦楽団等に客演し好評を博す。2002年よりウィーン国立歌劇場にて研鑽を積む。最近ではフランス国立モンペリエ管弦楽団、フランス国立リル管弦楽団、ドイツ・ヘッセン州立劇場管弦楽団（ヴィースバーデン）、コーミッシェ・オパー・ベルリン、ブリュッセル・モネ劇場管弦楽団などに客演。2011年大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウス「ねじの回転（ブリテン作曲）」公演で、第66回文化庁芸術祭大賞を受賞。2012年小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトXI歌劇『蝶々夫人』を指揮。 2013年には新国立劇場でオペラ「夜叉ケ池（香月修作曲）」（初演）を指揮予定。又、最近は作曲活動も行なっており、2011年に交響詩「ある物語に寄せて」と間奏曲の2曲のオーケストラ作品を初演。2012年には交響曲を初演する予定。その精緻な指揮と濃密な音楽作りで、今後の国内外での活躍が益々期待されている。

Orchestra　管弦楽：**市川交響楽団**（いちかわこうきょうがくだん）

2011年に創立60周年を迎えたアマチュアとしては全国有数の伝統を持つオーケストラ。

メンバーは現在100余名で年齢構成は20代から70代までの幅広い層にわたり、職業も会社員、教員、主婦など多彩。地元市川市での演奏会を中心に全国各地での文化行事やオーケストラ・フェスティバル等にもしばしば招かれ演奏を披露している。また、著名な音楽家との共演も数多く経験しているほか、特に地元ゆかりの音楽家との共演にも力を注ぎ、地域の音楽芸術の振興に多大な貢献をしている。市川交響楽団は市川混声合唱団、市川交響吹奏楽団、行徳混声合唱団、市響ジュニアオーケストラの各団体とで構成する市川交響楽団協会の中核として“クラシック音楽をより多くの市民に楽しんでもらおう”をモットーに常に積極的な活動を展開している。

Program note　プログラム・ノート

マーラー / 交響曲第1番「巨人」(新校訂版1992)

「音楽を教わりたいのです。」かっこう鳥はすましていいました。

宮澤賢治の童話『セロ弾きのゴーシュ』の一節です。

マーラーの『巨人』を初めて聴く人に最初に印象的なのは、第1楽章のイントロで聞こえるクラリネットによるかっこうではないでしょうか。鳥の啼く音は、はるかいにしえより「音楽の師」であり、歌姫。とりわけかっこうはベートーヴェンの『田園』、ディーリアスの　『春はじめてのカッコウを聞いて』、おもちゃの交響曲など多く使われています。

*

「たたとえば、かつこう　とこうなくのと、かっこう　とこうなくのとでは、きいていてもよほどちがうでしょう。」

「ちがわないね。」

「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまなら、かっこうと一万いえば一万みんなちがうんです。」

ふつうのかっこうはソ-ミやミ-ドなどの長3度(音の間に全音が1つと半音が1つ)が多いのですが『巨人』ではもう1音幅の広い完全4度で、その結果、上の音が強調された鋭さを持っています。

*

「どうかもう一ぺん弾いてください。あなたのはいいようだけれどもすこしちがうんです。」

一般的にかっこうの啼く音といえば自然の美しさと共に、安らぐ心をイメージしますが、マーラーのかっこうには鋭さを持ったなにか、苦悩や、不吉な感じがあることに皆さんはきっと気づくことでしょう。

*

「なぜやめたんですか。ぼくらならどんな意気地ないやつでも、のどから血が出るまではさけぶんですよ。」

マーラーはこの鋭いかっこうで、自分が持ち続けた子供のころからの死への恐怖、自分が認められないことに対する怒りなどのネガティブな感情を訴えているのかもしれません。「人が生きるにはポジティブな感情やイメージが不可欠だ。しかし、人はただ喜や楽だけを歌い続けることはできない。人の持つ推進力は怒や哀を心のバネとして喜や楽に向かう力を源にしている。大切なのはそのベクトルの向きだからだ。」ということでしょう。このかっこうは主人公の全てを見て支配しているかのように全楽章のいたるところに表れます。

*

「ああかっこう。あのときはすまなかったなあ。おれは怒ったんじゃなかったんだ。」といいました。

コンサートの成功後、ゴーシュはきっと何かをみつけました。この曲の第4楽章では第1楽章のイントロ部分が回想され、ここでもかこうは印象的に啼きます。それはまるで主人公の運命をかっこうがすべてを見、支配しているかのようです。

*

耳鳴りのような7オクターブにわたるA音で始まる**第1楽章**は『さすらう若者の歌』の第2曲「朝の野原を歩けば」が引用されています。この歌曲は小鳥が「おはよう」と挨拶する少年のようにさわやかなものです。ところが、この詞は最後に一転してこう結ばれます。

では、いまや私の幸せも始まったのだろうか?
いいや、いいや、私の望むものは
決して花開くことがない!

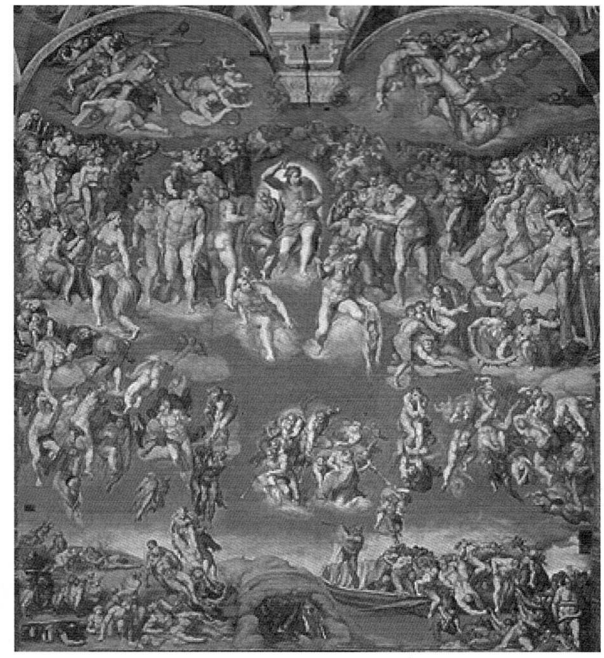
同様にこの楽章も、そんな結末を想像させるように終わります。

第2楽章はA－B－A'の3部形式の典型的なスケルツォです。Aのウィンナワルツの原型となったレントラー舞曲は男性的な村祭り、Bは女性的にバニラの香りただよう若者の恋をイメージさせます。Aは*f*、A'は*ff*と後半の方が大きな音量で始まるところをみると、中間部のBで、マーラーにはきっと良いことがあったにちがいありません。そして興奮うちに終わります。

一転**第3楽章**はコントラバスの高音が不安を書き立てるフランス童謡を短調にしたメロディがいく重にも重なり不気味さを漂わせます。中間部では『さすらう若人の歌』の終曲「彼女の青い眼が」が引用されています。この連作歌曲は、自分を裏切った恋人を、主人公は刺し殺し、放浪の果て菩提樹の下で息絶えるといった内容で、弱音器をつけたヴァイオリンにより、死の間際の思い出として回想されます、下記の歌詞の部分がそれです。

街道のそばに、一本の菩提樹がそびえている。
その蔭で、私ははじめて安らかに眠ることができた。
菩提樹の下、
花びらが私の上に雪のように降り注いだ。
人生がどうなるかなんて知りもしないが、
全て—ああ—全てが、また、素晴らしくなった。
全て!　全てが、恋も、苦しみも、
うつつも、夢も!

第2稿では「地獄から天国へ」と題された**第4楽章**は嵐のようなスペクタクルです。天上では妙なるラッパと審判を下す神、天使が上空を飛び、地獄の悪魔はケーッケッケッケッと笑う。私にはミケランジェロの「最後の審判」が目の前に浮かんできます。曲の終盤ではホルンは立奏し、マーラーの書き込み「ホルンがすべて(トランペットさえ)消してしまう」の下に「勝利」と書かれいます。　(かんばらひとし)

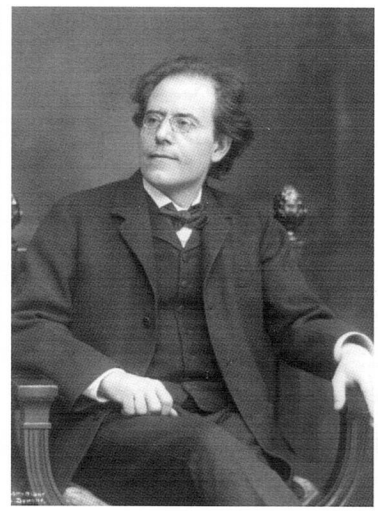


バチカン宮殿のシスティーナ礼拝堂の『最後の審判』(ミケランジェロ作)

●マーラー（Gustav Mahler, 1860 年 7 月 7 日 - 1911 年 5 月 18 日）

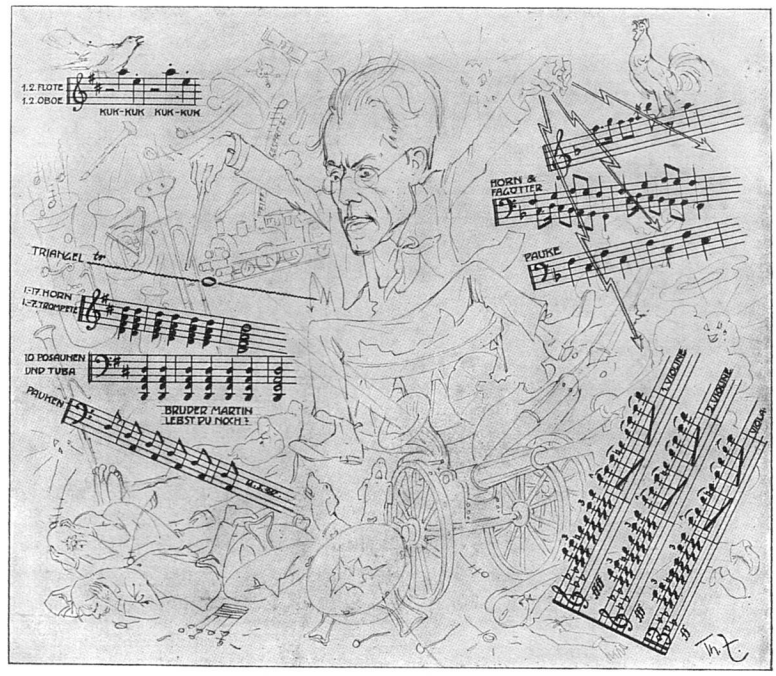
1892 年（32 歳）

1902 年（42 歳）



1909 年（49 歳）

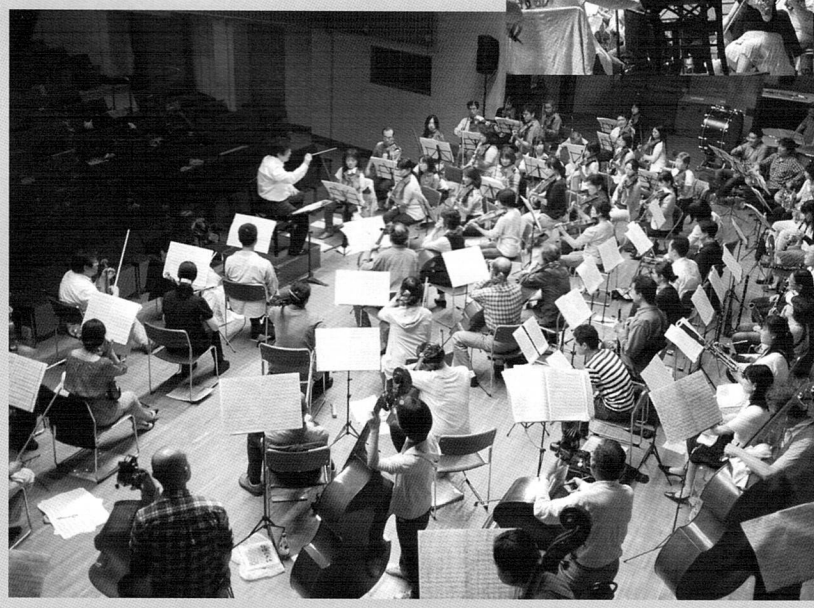
妻アルマの独身時代



交響曲第 1 番を指揮する
マーラー（テオ・ツァッシェ作）

GUSTAV MAHLER (1906).

●十束先生による『巨人』の練習風景
（市川市民会館にて）



●楽譜に指定されてる、珍しい木管楽器のベルアップ奏法

オーボエ

クラリネット

十束 尚宏 / 交響曲（初演）について

本日は、お暑い中、市川交響楽団演奏会にお運び下さいまして、どうもありがとうございます。私の曲について書くようにとのお話を頂きましたので、それを含めまして少し書かせて頂こうと思います。

先ず、本日お聴き下さるお客様皆様、そして演奏して下さる市川交響楽団の皆様に、心より感謝申し上げます。市川交響楽団の皆様には、練習時いつも大変暖かい雰囲気でお世話になりました。また、今回コンピューターでパート譜を作って下さった方々に御礼申し上げます。

さて、今回の私の交響曲ですが、共にソナタ形式からなる2つの楽章から成っており、34分程の作品です。最初は、25～30分程の、一般的な4楽章制の交響曲を書くつもりで書き始めたのですが、最終的にこのような形になりました。作曲期間は、昨年の秋から書き始め、我々夫婦の24回目の結婚記念日でもあった今年の「復活祭月曜日(Ostermontag)」に最後の音符を書き終えました。

ところで、元々、私は子供の時から作曲家になりたくて、小学生の時に、C-dur, D-dur, d-mollの3つの交響曲を始めとして、色々な編成、形の作品を書いておりました。学校の作文にも「作曲家になりたい。」と書いたものです。その後高学年になるに従い指揮者に憧れ、大学では指揮科に進み、指揮者として仕事をさせて頂いております。でもやはり、作曲はずっと夢であったので、最近再び勉強しながら始めました。今、自分の心の中では、作曲は大事な部分を占めており、最も心から楽しめる事です。

ウィーンの自宅には、私が作曲するのに必要なピアノがあるので問題ないのですが、仕事で日本に滞在している間、ピアノの工面で大変お世話になった方々がいらっしゃいます。これらの方々にも感謝申し上げます。昨年9月～10月にオペラ公演でお世話になった大阪音大カレッジオペラハウス（熊倉様）は、練習が無い日も含めて、毎日朝から夜の閉館まで、劇場内の指揮者の楽屋とその楽屋のピアノを自由に使わせて頂く事ができました。この時に書いたたくさんのスケッチから、この曲は生まれました。 今年の2月～3月にお世話になった小澤塾（栗田様）でも、やはり練習が無い日でも毎日練習室のピアノを使わせて下さり、地方滞在の際にも、私のホテルの部屋にずっと電気ピアノを借りて下さいました。それは最後のオーケストレーションの時期でした。

そして、書き上げた後、私は別の仕事とその準備のため何もできなかったのですが、私の妻が全てのパート譜を手書きで書いてくれました。その為に私の2人の子供達も色々と協力してくれました。

この曲が出来、そして今日演奏して頂けるのは、本当に色々な方々のお陰です。この場をお借りして皆様に心より深く御礼申し上げ、ごあいさつとさせて頂きます。

どうもありがとうございました。

十束 尚宏

本日の出演者

【コンサートマスター】
立田祥子

【第1ヴァイオリン】
石崎俊信
石本恵理
上田佳津子
笠松秀臣
鎌田真貴
菅原夕
佐藤薫
秦一宜
武藤真祐子
望月聖仁
森山淳子

【第2ヴァイオリン】
亀井玲子
佐分利幸江
滝澤葉子
富田八江子
仁井理絵
林美穂
番場美帆
久田しげ子
古澤宏美
溝田範子
武藤敦子
村上葉子
望月優子
吉岡一郎

【ヴィオラ】
内田綾美
大橋かおる
佐々木裕史
柴崎広子
鈴木亜矢子
高野重樹
谷口善樹
奈良林弘子
星乗昭
若林繁

【チェロ】
岩田啓子
倉澤倫子
中村公一
野中能久
林恭代
日澤優
福原耕二
堀合麻由美

【コントラバス】
荒木夏奈
池田和正
上村啓介
神代順子
菊池克彦
小林真弓
髙柳亙宏
花井さと実
番場仙嘉
村上信乃

【フルート】
遊馬陽子
木村眞諭紀
佐藤洋行
番場ますみ

【オーボエ】
荒井淳
本間広樹
二村直子

【クラリネット】
井垣貴嗣
一瀬直美
時田雄
半藤嗣人
八木良子

【ファゴット】
井垣葉子
菅原斉
増子恭一
山内静

【ホルン】
木下泰斗
近藤利昭
潮見恵子
嶋村恒夫
林田朋子
藤井茂司
吉川淳史

【トランペット】
安藤宣明
岡崎英里
田崎真二
柳澤武志

【トロンボーン】
齊藤翼
坂田圭
吉川昌憲

【チューバ】
渡邉鉄雅

【打楽器】
児玉和人
篠崎美奈子
鈴木充
都筑裕
和田英恵

【ハープ】
大木理恵